

## ■特集■犬の歌・猫の歌

# コンパニオンアニマルとしての犬、猫

武富純一

日本人と犬・猫の関わりは万葉以前の昔からあるという。だが、歌として多く詠ま

れはじめたのは明治時代以降、西洋からの多数の輸入によって日常の身近なペットとして広く普及しだしてからだ。

近代の犬・猫の歌を、まずは石川啄木と若山牧水に探ってみた。

- ・わが泣くを少女等きかば／病犬の／月に吠るに似たりといふらむ
  - ・愛犬の耳斬りてみぬ／あはれこれも／物に倦みたる心にかあらむ
  - ・われ饑<sup>う</sup>ゑである日に／細き尾を掉<sup>ふ</sup>りて／饑<sup>う</sup>ゑて我を見る犬の面よし
  - ・時ありて／猫のまねなどして笑ふ／三十路の友のひとり住みかな
- 石川啄木『二握の砂』
- ・猫の耳を引っぱりてみて、／にやと啼けば、／びつくりして喜ぶ子供の顔かな。
  - ・猫を飼はば、／その猫がまた争ひの種と

なるらむ、／かなしきわが家。

『悲しき玩具』

病犬に例える自己の泣き声、犬の耳を傷つける行為：啄木は犬をあまりよくは思っていない。どこか卑近なものとして見る感じがする。三首目も飢えた犬と自己との比較で、よしと思いつつも犬を自己よりも格下のものとして見ている。自分はそんな犬そのものなのだという自虐心理が底辺にある。

一方、猫にはそうした思いは少ないようだ。四首目は独り住まいの寂しい友の仕草としての猫の鳴き真似、五首目の対象は子であって猫が主ではない。

しかし、それでも猫はどこか暗いイメージの生きものとして扱われていて、六首目などは家庭が明るくなるよう期待して飼った猫さえもが、また平和を乱す存在になっ

てしまうという、なんとももの悲しい現実である。

また、「庭のそとを白き犬ゆけり。／ふりむきて、／犬を飼はむと妻にはかれる。」が犬の歌でよく引き合いに出されるが、どこか明るさを含んでいるこの歌でさえ、もし石川家で犬を飼えば五首目の猫と同様な結果になりそうな気がしてならない。（ちなみにこの歌は『悲しき玩具』の最後の一首とされているが、実はこの後に書きかけの一行で終わっている未完の歌がある。）

- ・では、牧水は犬猫をどううたっただろう。枯草にわが寝て居ればあそばむと来て顔のぞき眼をのぞく犬
  - ・ゆふまぐれ遊びつかれてあゆみ寄る犬と瞳のひたと合ひたる
  - ・指に触るるその毛はすべて言葉なりさびしき犬よかなしきゆふべよ
- 若山牧水『路上』
- ・子を生みし疲れか暫し吠ゆることを忘れ